

6-2-3 田中大秀の住居 その2

錦山神社の前を歩いて旧街道を進むと、やがて荏名（えな）神社がある。飛騨を代表する国学者・田中大秀が再興したといわれるこの地は、また大秀の住居でもあった。

大秀の功績はその代表的労作としての『竹取翁物語解』をはじめ『蜻蛉日記紀行解』、『土佐日記解』など多くの古典の注解を果たし、特に竹取は、今日でもその研究の基本となっていて高く評価されている。一方、富田礼彦（いやひこ）、山崎弘泰など多くの門弟を育て、維新前後の飛騨の文化的・精神的中心人物を生み出した。

『広辞苑』の中で、飛騨出身の人名を拾って目にとまるのは、この大秀と金森宗和の二人しかない。そのことをもって大秀の業績をはかるわけではないが、飛騨の歴史の中で全国に通用する第一級の文化人であったことは間違いない。

大秀は、本居宣長（もとおりのりなが）が死ぬ半年前に入門し、宣長の死後は、養子の本居大平（おおひら）について学んだ。紀文から大秀と改名したのもこの年で、盲目の長子・本居春庭（はるにわ）と二派に分かれた鈴門の中で、大平を師と選んだことになり、大平への傾斜の過程がうかがえる。松阪市の本居宣長記念館の加藤清太郎さんが「宣長に五百人以上の門弟があっても、その多くは和歌が上手になりたくて入った人で、国学をやるうとした弟子はきわめて少なかった」と語られるが、大秀は、そのきわめて少ない弟子の中に入るのであろう。同館には、大秀の『住吉物語校異』の稿本がある。

飛騨における大秀の活躍には目ざましいものがあつたが、その業績の中には、時として正鵠（せいこう）を欠くのではと思われるものもある。たとえば荏名神社の再興について『紙魚（しみ）のやとり』で加藤歩蕭（かとうほしょう）は、

「延喜式（えんぎしき）飛騨八神の内、荏奈明神の社地むかしよりしる人なし、しかるを田中屋弥兵衛（おおひで）という人、江名子村いな桶といへるちいさき祠を荏奈明神なりとて、文化十一年（1814）新たに荏奈の神名を鑄たる神鏡を納め、文化十二年八月初て神事を行いける、古来より社地の詮議文明ならざるをいかなる証拠を見出したるや、もしくはおしはかりにて荏奈の社地なりといふにやしられず、御検地帳にもなければ宮地とは仕（つかまつり）がたき所なり・・・いな桶とはえな桶の転語なり、大むかしは胞（えな）を納る地にして所々にあり」

と記して、胞、つまり後産（あとざん）を捨てるどころだったと言っている。このような敷衍（ふえん）の強引さは飛騨総社の再興にもとかくの論議を呼び、萩原町の浅水橋（あさんずばし）の地名考についても平瀬担斎と争っているし、車田の碑文の馬籠野（まこもの）の解釈にも無理が見られる。

偉大な郷土の先覚に何をつける気は毛頭ないが、学問上の功績とは別に、大秀の人間像には、ところどころ衒（てら）いがみえる。

大秀の歌の心に、宣長のめざした「もののあはれ」「歌は物のあはれをしるよりいであるもの也」という境地はやや乏しい。